

【I.実習報告1 豊島区みらい館大明】

社会教育施設で“学ぶ”楽しさ広がる“未来”

— 「みらい館大明」における異文化理解と子ども体験活動事例から—

心理社会学部 人間科学科 3年 平良菜月



【キーワード】

教育 子ども 生涯学習 学び

【概要】

みらい館大明では、子どもから大人まであらゆる人に対して「学び」を提供している。開かれた学びを展開している生涯学習施設の講座に参加し、生涯学習・社会教育の観点から学びをどのように展開しているのか捉える。講座の展開方法や参加している人の視点から、生涯学習施設の存在はどのようなものか探る。

1. 背景

「誰にでも学ぶ権利がある。」社会教育・生涯学習ではどんな人でも学べます¹。誰でも学ぶことができると言えば、学校教育を思い起こしますが、明治以来、学校教育を通して近代化がすすめられ、その結果今日の学校教育は「良い中学校」「良い高校」「良い大学」に進学して「良い会社」に入ることが目的となっている風潮がずっと続いているように見受けられます。一方で生涯学習の考え方として、1992年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」において、「今後人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が社会において適切に評価されるような生涯学習社会を築いていくことを目指すべきである」という生涯学習社会の構築が目標として掲げられました。自由に、学ぶ、このことは、学校教育の考えとは一線を画すものではないかと思います。

私が、この領域に関心を持ったきっかけは、学びたくても学ぶ方法がわからない人に対して、学びを発信できるのではないかと思ったからです。かつて私もその一人でした。学校教育以外の学びの世界を知ることができず、学校以外の学びはすべてにおいて費用等の負担が発生するものと思い、学びへのアクセスは困難だと考えていました。

しかし、学ぶ意欲がなかったわけではありません。学校内で経験できるものは積極的に行ってきました。例えば、校内で募集している保育園・幼稚園・学童・老人ホームのボランティアに参加したり、部活動に入ったり、校内でのフェスタにスタッフとして参加したりと、学校内で経験できることはなるべく参加しました。

こうした経験も十分よい経験になりましたが、一方で、自身の技量を伸ばすことはあまりできなかったと実感しています。例えば、スポーツの学習などで、費用をかけて水泳教室に通うことで、泳げるようになるといったことがあると思います。確かにアスリート育成や、その分野をさらに向上させるために、費用をかけて成長させることは理にかなっていると思います。しかしそれほど高度ではない一般的な領域で「できない」ことを「できる」ようにしたい場合でも、やはり費用負担をかけなければならないのでしょうか？

そのような中で、実習先である「みらい館大明」で、さまざまな年齢層の方が生き生きと学ばれている姿を見て、とてもうらやましく思いました。加えて、私がずっと懸念していた費用について、どの講座も安価なので子どもにいい経験をさせようとする親御さんや、もっと自分を高めたいと参加される方まで、実にさまざまな人が講座に参加されていました。こうした生涯学習施設での地域のあり方に関心を持つようになり、また多くの人を受け入れている大明のあり方に私も関わっていきたいと思うようになりました。

¹ 1985年にパリで開催された第4回ユネスコ国際成人教育会議（CONFINTEA IV）で「学習権宣言」が採択された。主に、学習権は、読み、書く権利であり、質問し、分析する権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、教育の手立てを得る権利であり、個人及び集団の力量を発展させる権利である。

2. 目的

生涯学習施設「みらい館大明」では、どのように講座を展開しているのか、地域に根ざした活動とは何かを学ぶことを目的に、特に子どもに対しての講座について、学校教育とは別に、生涯学習施設で学ぶ子どもの意義を、年齢階層的な学校教育とは異なる視点から明らかにしていくこととしました。

3. 実習施設の概要

(1) みらい館大明

2005年3月末に閉校した豊島区立大明小学校跡施設を利用し、同年10月に地元有志の管理によりオープンした生涯学習施設です。

「地域づくり」と「学び」を事業の柱に、地域サークル活動や勉強会への施設貸出し、地域交流イベントや各種講座の開催等を行っています。生涯学習施設として、子どもからシニアまで、さまざまな年代の方が利用しています。



写真1 みらい館大明の概観

(2) ブックカフェ

「豊島区」と大明を運営する「NPO 法人いけぶくろ大明」が、元小学校の図書館を活用して、生涯学習センターモデル事業「若者支援事業」として、協働実施しています。

ブックカフェには、数多くの本やおもちゃなどがあり、飲食も可能なため、自由な雰囲気の中で、様々な学習活動に取り組むことができます。また、自分がやってみたい企画などを持ち込んで、実現することができます。曜日ごとにコーディネーターが常駐しており、進路や人生、企画の相談など多面的なアドバイスに乗ってくれます。

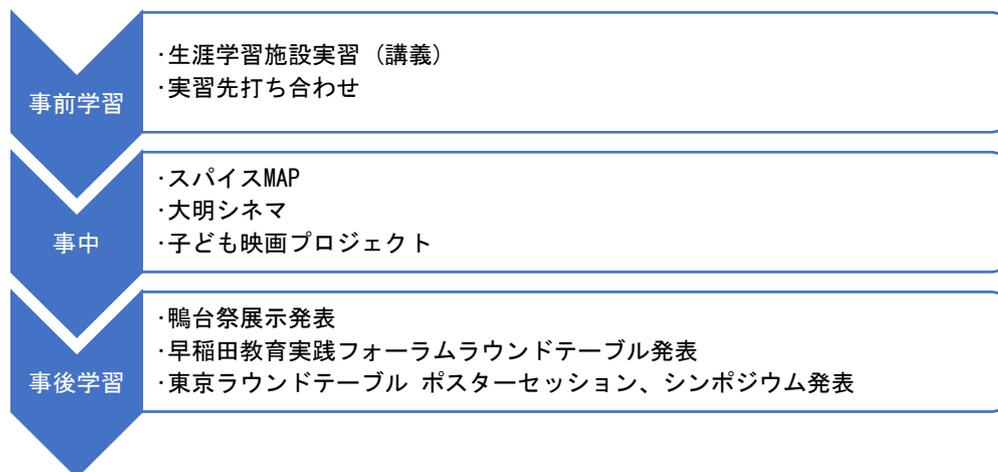


写真2 ブックカフェ内の図書

4. 実習方法

(1) 実習プロセス

実習では主に、スパイスMAP、大明シネマ、子ども映画プロジェクトの3つの活動に参加しました。また、実習後も、みらい館大明と連携している特定非営利活動法人SLCに参画しています。



(2) 事前

春学期 生涯学習施設実習(講義)

6月5日(火) スパイスMAP 事前相談

7月10日(火) スパイスMAP 事前ミーティング

8月19日(火) 子ども映画プロジェクト打ち合わせ（一部）

(3) 事中

7月17日(火) 第一回スパイスMAP

7月31日(火) 第二回スパイスMAP

8月19日(火) 大明シネマ実施

8月21日(火) 第三回スパイスMAP

8月23日(木) 第一回子ども映画プロジェクト

8月24日(金) 第二回子ども映画プロジェクト

8月25日(土) 第三回子ども映画プロジェクト

8月26日(日) 第四回子ども映画プロジェクト

9月23日(日) 子ども映画プロジェクト上映会

(4) 事後

11月2日(土)・3日(日) 鴨台祭模造紙展示、パワーポイント発表

11月10日(土) 早稲田大学教育実践フォーラム ラウンドテーブルでの発表

12月22日(土) 東京学芸大学 ポスターセッション、シンポジウム

1月9日(日) 日本こども映画コンクール授賞式

5. 実習内容

(1) スパイス MAP

1) 事前ミーティング 6月5日(火)、7月10日(火)

豊島区では外国籍住民が急激に増加しています。豊島区の外国籍住民数は、2017年に過去最高の27,060人となり、また中国、韓国、ベトナム、ネパール、ミャンマーなどのアジア系の住民國籍の割合が大きく増加しています。豊島区のみならず、日本では外国人との生活は当たり前になりつつある一方で、豊島区の生涯学習施設では外国人の利用はあまり見られないという現状です。

そのような背景から、外国人にも生涯学習施設であるみらい館大明に参加してもらいたいと思っています。その際にまず私たち日本人が外国のことを知る必要があります。そこで、スパイス MAP では、「食」というテーマのもと、日本ではなかなか利用する機会が少ない外国食材店へ行くことで、多文化の関心を深めます。食材店で購入した調味料や食べ物を、日本の調味料を使わずに調理することで、外国食材への理解を深めることで、多文化共生につながると考えます。

事前ミーティングでは、みらい館大明で初めて講座に参画するにあたって、スパイス MAP 講座担当者が作成した資料を共有しました。

2) 実習中

第1回 7月17日(火)

事前に頂いた豊島区の概要などをまとめた資料を参考に座学を行いました。次に、第2回で実際に外国食材店へ行く際、ネパール、ハラール、中国食材店のチーム分けを行いました。各チームでは、それぞれ担当の食材店で調味料や食材を選び、第3回で実際に購入した食材や調味料を使って料理します。私は、ネパールの担当になりました。



写真3 外国食材店のお菓子

第2回 7月31日(火)

食材店へ全員で行き、それぞれ担当となった食材店で購入する調味料などを選びました。店舗は、みらい館大明から近い順にネパール食材店「ブッダ」、ハラール食材店(パキスタン料理)「アル ファラ スーパーマーケット ムスリム ハラルフード」、中国食材店「友誼商店」を訪れました。最後の中国食材店で現地解散としました。

ネパール食材店「ブッダ」では、住宅街の一角にあるため、店だと言われなければ気がつかない場所にありました。しかし、ネパールの国旗があり、外観からは外国の何かであることはうかがえました。店に入ると、通路は一人一人がすれちがうことが難しいほど狭い

のですが、その分穀物やお菓子などかなり多くの品物が積まれていました。

日本人のお客さんはいなかったものの、外国レストランの業者らしき人が、この食材店を利用していました。一般のお客さんよりも、祖国の食材を購入できる食材店として、レストラン経営者が多く利用しているのではないかと思います。

ハラル食材店 (パキスタン料理)「アル ファラ スーパーマーケット ムスリム ハラルフード」は、比較的駅の近くにあり、少し奥まったビルの4階にありました。店内は日本のスーパーマーケットに似ており、中でも印象的だったのは、合わせ調味料が数多くあったことでした。食材と合わせ調味料を使うことによって、簡単に手の込んだ料理を作ることができます。店員も気さくな方でしたので、外国食材を購入しやすい雰囲気だと思いました。

最後に訪れた中国食材店「友誼商店」は、池袋駅からとても近く、ビルに店名が書いてあるため、見つけやすい店舗です。中は、日本のスーパーマーケットと変わらないレイアウトでした。お客さんは中国人がほとんどでかなり賑わっており、中国語が飛び交っていました。生け簀や中国野菜もあり、豊富な種類を取り扱っていることがわかります。



写真4 ネパール食材店「ブッダ」



写真5 中国食材店「友誼商店」



写真6 ハラル食材店 (パキスタン料理)
「アル ファラ スーパーマーケット ムスリム
ハラルフード」

第3回 8月21日(火)

前回購入した調味料や食材と、参加者が持ち寄った野菜などを使って、チームに分かれて料理を作りました。

全員が外国の調味料のみを使うことが初めてに加え、調理方法が載ったレシピに日本では当たり前分量の表示がないため、徐々に調味料を足していくなど試行錯誤しながら行いました。参加した人からは、思わずしょうゆやソースを使って味を調べたいとおっしゃっていた方もいました。



写真7 外国の調味料を使った料理

(2) 大明シネマ 8月19日(日)

2009年にインド映画歴代興行収入1位を記録した「きっと、うまくいく」をみらい館大明の中にある視聴覚室にて午前10時30分と午後2時からの2回上映しました。実習ではプロジェクターなど映画の機材のセット、受付業務、上映補助を行いました。大明シネマは無料なため、家族で来た方や、この映画が好きで来たという方など様々な人がいました。

途中プロジェクターがずれたことや、配布していた麦茶がこぼれてしまい、お客さんには不愉快な思いをさせてしまったのではないかと思いましたが、上映終了後には楽しかったとおっしゃっていただいたことが良かったです。



写真8 大明シネマ内の様子

(3) 子ども映画プロジェクト

1) 事前打ち合わせ (30分程度) 8月19日(火)

大明シネマの実習中、子ども映画プロジェクトの脚本についてスタッフと小学生が打ち合わせをするということで、急遽30分程度参加することができました。

プロジェクト当日は、脚本家本人が用事で子ども映画プロジェクトに来られないということもあり、脚本について熱く議論が交わされました。特に、ラストシーンについて、脚本家と



写真9 代表の子どもたちとの打ち合わせ

監督の意見が対立しており、私がいる間には話がまとめることができずにいました。

子ども映画プロジェクトということで、大人が一方的に介入してなだめるばかりでなく、子ども同士で意見の共有や討論を繰り返すことは、貴重な経験だと感じました。

2) プロジェクト本番

1日目 8月23日(木)

子ども映画プロジェクトは、2018年で7年目を突入しました。きっかけは、東日本大震災で、子どもたちを元気にしたいという思いから始まりました。参画しているスタッフとして、映像関係の大学に通っている大学生、海外番組の制作に携わっていた方、番組ディレクターの経験者、映画監督やアニメのメイキングを担当していた方など、プロの映像関係に携わっている方を中心とした本格的な映画撮影のメンバー構成でした。

まず、映画関係者による映画作りの流れを小学生とともに学びました。企画、脚本、撮影、編集、完成上映などの流れから、照明、音響、監督、音声、助監督、役者、脚本家、プロデューサー、美術、道具・小道具、記録など、映画に必要なポジションの確認を行いました。

この日はシーン2の撮影を行いました。マイクがカメラに映らないようになど、細やかな配置や、音量など小学生に指導を行いました。



写真10 カメラの説明を子どもたちに行っている

2日目 8月24日(金)

前日の一部撮り直しと、シーン1、3、4の撮影を行いました。演技にも慣れてきた主演の2人は、セリフをすでに覚えてきているため、撮影は終始スムーズに行うことができました。



写真11 撮影に備える子どもたち



写真12 撮影を行っている場面

3日目 8月25日(土)

シーン7, 8の撮影と、主役2人の勉強シーンの撮影を行いました。当日は気温が高く、撮影会場はエアコンがなかったため、撮影へのエネルギーが途絶えないことに加え、熱中症対策として塩分タブレットを持ち込みました。

3日目ということもあり、撮影に慣れてきた子どももいたため、にぎやかに撮影することができました。しかし、エキストラ出演などがほとんどなかったため、主演の2人以外は暇な時間ができてしまいました。



写真13 撮影のタイミングを出す子ども

4日目 8月26日(日)

子ども映画プロジェクト撮影最終日。この日は残すところラストシーンの撮影のみのため、撮影に携わる班と、映画のポスター制作の班に分かれての作業となりました。私は、ポスター制作と主題歌をつくっていました。

主題歌は、映画に関するキーワードを子どもたちが出し合い、そのキーワードをもとに歌詞を構成しました。メロディーは、スタッフの人がギターを演奏し、それに合わせて歌いました。ポスター作成に当たっては模造紙に、映画のタイトルとプロジェクト名を自由な発想で書きました。

撮影終了後、スタッフが簡易的に編集した映像を公開し、子ども映画プロジェクトの撮影は終了となりました。

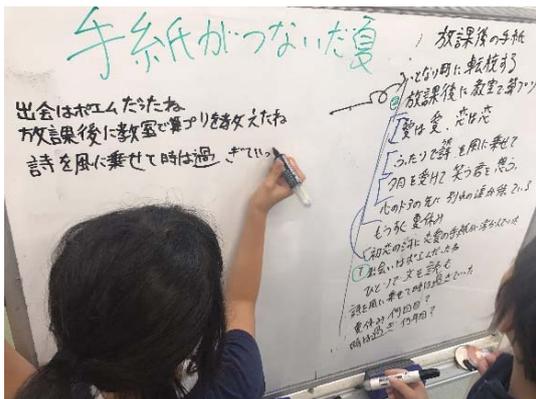


写真14 主題歌の歌詞作成



写真15 仮上映会

上映会 9月23日(日)

効果音やエンドロールを加え、一人ひとりにDVDと一言メッセージを配布してくれました。上映会では、「あのときのカットはどのように使われていたのか」と、子どもたちは食い入るように見入っていました。保護者の方も一緒に笑ったり、関心したりと、このプロ

プロジェクトが完成したことに感動していました。

6. 成果について

(1) 実習からの学びとして

一番の成果は、及ばないながらも私が学びたい人の援助ができたことです。私自身が「学びたい」から、「学びたいと思っている人を助けたい」と思うようになりました。実習でみらい館大明を通じて、視野を広げられたことが一番の成果だと感じています。

二つ目は、学びの場が、学校以外にも見つけられたことです。学校教育しか知らなかった私ですが、学校は映画の撮影方法を教えてくれません。外国食材店も訪れることはこういう機会がないと実現できなかつたと思います。

生涯学習施設はどんな人にも門戸を開いているということが特徴です。この「どんな人」という意味は、性別、年齢、学歴、職歴、貧困、富裕層、住まい、国籍などは問わない、さまざまな人が利用できます。そういった施設が存在していること自体、私は大学で社会教育主事課程を取るまで知りませんでした。生涯学習施設をもっと色々な人に知らせ、活用してほしいと改めて思うようになりました。

(2) 実習先について

社会教育主事や教職課程などの学生、生涯学習施設の実習を受け入れることによって、施設側も改めて生涯学習・社会教育と施設がどう関連しているかの認識を深めることができるのではないかと思います。実習生を受け入れるということは、施設側は実習の施設の在り方の説明などを行います。その際に、施設の説明や意義などを記載した資料などを用いて実習生に説明する場合はほとんどだと思います。つまり、施設側がこうした資料を作成しているということになります。作成した資料は、実習生以外にも転用することができます。こうすることで、新たに生涯学習施設を利用したい人にも広がっていくきっかけにもなればと考えました。

(3) 地域社会について

地域と施設が社会教育でつながることで、より団結したものになります。学校と地域が連携することが多いと思いますが、近年、学校は防犯のため授業中は門を閉鎖するなど、地域と学校が離れているように感じます。学校と地域住民が継続して連携していくために、生涯学習施設が仲介役となることで、かかわりを途絶えさせないようにできると思います。

7. 考察と明らかになったこと

(1) みらい館大明の参加者に着目して

みらい館大明の講座に参加している人は、いずれも学習に対して意欲的な人が多い印象を受けました。また、子ども映画プロジェクトに参加した保護者もこうした活動に積極的

な印象でした。主催者側が主導権を握るのではなく、参加した子どもの保護者にどうしたら人が集まるのか相談する場面もありました。このことは、講座として成立するためにも、まず参加者の視点に立つとともに、その参加者が何を求め、どのような場合に参加したいと思えるのか生の声を聴くことが重要であることを示していると考えられます。

(2) 施設を利用しない人への支援

一方、こうした講座に参加したいと思っているが、機会や入っていく勇気がないという人にどうアプローチするかが課題だと考えます。

この課題について、社会福祉の分野などで用いられるアウトリーチ活動を用いて、「待ち型」から「出向く型」の支援が考えられます。アウトリーチ (Outreach) とは、「手を伸ばす、差し伸べる」ことを意味しています。こうした講座に参加している人は能動的に自ら働きかける人が多い一方で、やってみたいけどわからないので不安と思っている人に対しては、直接呼びかける必要が求められます。みらい館大明は豊島区という人が多い地域のため、積極的な人が多いですが、参加したくても参加できない方々も数多く存在しているものと思われます。豊島区はもちろん、さまざまな地域でアウトリーチ実践をすることで、例えば子供の取り組みなどでも、その子どもの将来への選択肢を広げるとともに、保護者にも精神的にもゆとりをもたらす効果が期待できるのではないかと考えられます。

(3) 施設外活動の限界

アウトリーチ型活動は施設を利用しない人に対して効果的な方法だと思います。しかし、現状としては、以下の問題があるとの指摘があります (鈴木・井上・大木 2015)。

第1に、アウトリーチ型事業が学校支援に利用されていることです。子どもの場合、学校教育の延長線上として、社会教育施設を利用する人が多くいますが、施設側の積極的なアウトリーチではないと思われます。社会教育施設が学校の補完的役割として使われるだけでなく、個々人の主体性に寄り添う形で使われるような取り組みが必要だと考えられます。

第2に、アウトリーチ型活動は、権威主義的視点である点です。アウトリーチ型活動の「手を差し伸べる」という行為は、上から目線に教えるという意味に捉えられる可能性があります。このとき、上下関係ができてしまうのではなく、学習者の目線に立って、学習者がどのようなことを求めているのか汲み取る力も必要だと考えられます。

社会教育施設は学校ではありません。しかし、学校と全く別のものと考えする必要もないと思われます。学校と連携しつつ、個人でも利用してくれるような仕組みがあるとさらに効果的だと考えられます。社会教育施設の強みは、学校と異なり様々な世代が利用できるという点です。この強みを生かして、学校では経験できないことを展開できたらと思われます。

(4) 学校教育とは異なる学び

みらい館大明では、講座を参加者とともに作っていくスタイルが印象的でした。

今回参加したスパイス MAP では当初、料理のメニューを日本人になじみの深い即席ラーメンを予定していました。それぞれの国において、即席麺があるため、食べ比べを行うことで、各国の味を知ることができます。しかし、今回の話し合いで、ドレッシング作りという案が出たため、急遽即席麺という方向性から外国食材店から購入した調味料を配合したドレッシング・たれ作りへと変更となりました。

学校や、堅い講座・講義では、予め教員やスタッフが企画を行い、参加者は指導者に従って講座を展開することが多いと思います。しかし、みらい館大明では、参加者が「こうしたらいいと思う」という声に柔軟に対応することで、講座をスタッフと参加者の双方で作り上げて講座を完成する姿勢に驚きました。やはり、学校教育とは異なり、社会教育施設の在り方はこうなのかと実感することができました。

【謝辞】

最後に、みらい館大明では私が幼い頃やりたかったことがなされていて、実習などを通じてとても視野が広がる経験をさせていただきました。実習やインターンを快く受け入れてくださった荘司さん、スパイス MAP でお世話になった柳川さん、子ども映画プロジェクトの松井さんに深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

また、1月19日(土)に行われた日本子ども映画コンクール授賞式にて、子ども映画プロジェクトの作品が「入賞」及び「審査員特別賞」に選ばれたこと、誠におめでとうございました。

【参考文献】

笹井宏益・中村香 (2014). 生涯学習のイノベーション 玉川大学出版部

鈴木眞理・井上伸良・大木真徳 (編) (2015). 社会教育の施設論—社会教育の空間的展開を考える— 株式会社学分社

【I.実習報告2 としま案内人駒込・巣鴨】

学生地域ガイドによる地域の次世代育成

人間学部 教育人間学科 3年 早川誠



写真 地域ガイド活動を実践する筆者

[キーワード]

地域ガイド、学生ガイド、次世代育成

【概要】

学生を対象とした地域散策会への参加をきっかけに学生は地元地域との関わりが薄いと感じた。そのため、地域と深く繋がりガイド活動を行っている「としま案内人駒込・巣鴨」の活動に参加し、地域ガイド団体と地域との関係性について学び、いかに学生が地域と関わることができるかを考えた。

活動に参加していく中で学生自身が地域ガイドを行うことが、地域とつながるためには有効ではないかと考えた。そのため実習ではガイド団体の運営やガイドスキルについて学び、最終的に学生ガイド団体を作ることを目標とした。

1. 背景

大学生は自分の地元との繋がりが薄い。私は「としま案内人長崎町」が行った学生を対象とした地域散策会に参加し、そのように感じた。定員が20名で豊島区の各大学に呼びかけをしての散策会だったが、参加した学生は私を含め4名だけだった。その企画を通して自分の住んでいる地域や通っている大学のある地域を学ぶ機会があまりなく、知らない事が多くあると感じた。また、自分と関係のある地域に興味の無い学生も少なくはないと感じた。学生と地域との繋がりが、地元の若者と地域との繋がりが薄くなってしまったため改善する必要があると考えた。

一方で、地元地域に興味のない学生ばかりではない。大学生対象の散策会に参加した人の中には、自分の住んでいる地域の事を知りたいために参加している人もいた。そういった学生を地域の次世代として育成していくことが、地域の発展や繋がりづくりといった面で必要であると考えた。

実習を通じて、としま案内人と同じように地域のガイド活動を行う学生主体のガイド団体を組織することができれば、地元地域の次世代を担う学生を育成することができると考えた。

2. 実習の目的

社会教育団体「としま案内人駒込・巣鴨」で地域ガイドをどのように企画し、実行しているかについて学ぶ。ガイドのスキルや会の運営についても学び、学生が地域ガイドに参加することによってどのようなメリットがあるかを考える。また、どのようにすれば参加してくれるかを考え、構想を作りあげていく。

3. 団体概要

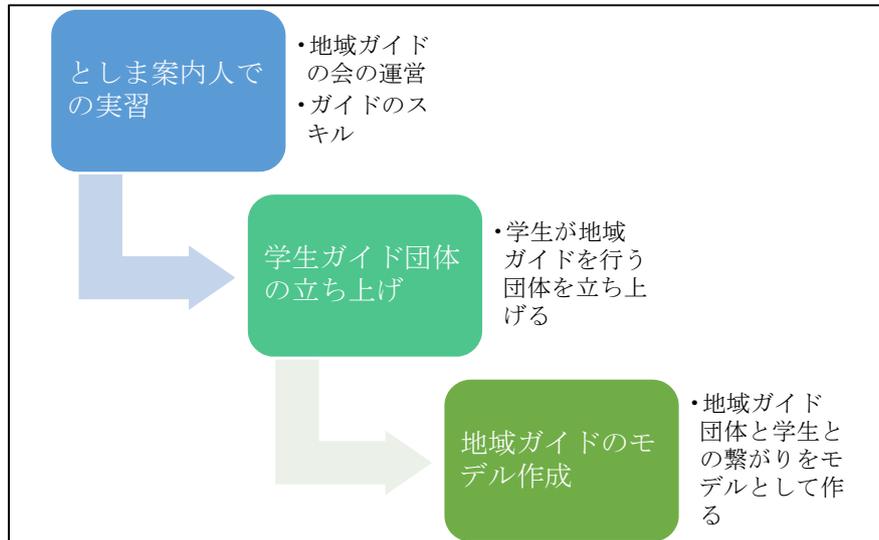
「としま案内人 駒込・巣鴨」は平成23年に準備会が立ち上がり、2年の研修を経て平成25年に発足した。豊島区の社会教育・生涯学習団体、ボランティアガイド団体として活動しており、現在会員は20名を超えている。

主な活動は、地域の学習と案内で、地域に関係する講演会・研修会などを実施し、その成果をガイド活動で紹介している。

ガイド活動はJR駒込駅・巣鴨駅・大塚駅 都営三田線西巣鴨駅 都電荒川線庚申塚駅などを出発場所として、豊島区・文京区・北区・板橋区での案内活動へと展開している。

2017年には英語での案内も開始している。

4. 実習のプロセスと方法



図：実習プロセス

(1) 事前

- 6月9日 旧古河庭園&飛鳥山コース ゲスト参加
- 6月11日 としま案内人駒込・巣鴨 6月定例会議
- 6月13日 大正大学 社会教育計画論 街歩き講義
- 6月20日 大正大学 社会教育計画論 街歩き
- 7月9日 としま案内人駒込・巣鴨 7月定例会議

(2) 事中

- 7月14日 JICA ガイド ガイド参加
- 8月6日 としま案内人駒込・巣鴨 8月定例会議
- 9月10日 としま案内人駒込・巣鴨 9月定例会議
- 10月8日 としま案内人駒込・巣鴨 10月定例会議
- 10月12日・13日 西巣鴨周辺ガイド ガイド参加
- 10月16日・23日 早稲田大学留学生ガイドプロジェクト打ち合わせ
- 10月30日 早稲田大学留学生ガイドプロジェクト 事前学習

(3) 事後

- 11月2日・3日 鴨台祭模造紙展示、パワーポイント発表、地域ガイド体験企画
- 11月6日 早稲田大学留学生ガイド ガイド参加
- 11月10日 JICA ガイド ガイド参加
- 11月10日 早稲田教育実践フォーラム ポスターセッション
- 11月12日 としま案内人駒込・巣鴨 11月定例会議

- 11月25日 留学生餅つきガイド ガイド参加
- 12月10日 としま案内人駒込・巣鴨 12月定例会議
- 12月11日 早稲田大学留学生ガイドプロジェクト 事後報告会・交流会
- 12月22日 東京学芸大学 シンポジウム
- 1月14日 としま案内人駒込・巣鴨 1月定例会議

5. 実習内容

(1) 旧古河庭園&飛鳥山コース 6月9日

実習を始めるにあたり、としま案内人が行っている地域ガイドとはどのようなものか把握する必要がある。最初の実習活動であった旧古河庭園と飛鳥山のコースの案内活動では、ガイド側の参加ではなく、サポートと見学をした。

ガイドを行った6月9日は晴天の猛暑日であった。そのため、こまめな休憩を取りながらガイドは行われた。駒込駅を出発し、旧古河庭園へと向かった。ただ、歩きながら向かうのではなく、その場所に関係する話をするなど参加者を飽きさせないようにする工夫が見受けられた。最後は飛鳥山の見どころの一つであるあじさいの見られる場所で解散をした。この場所で解散した理由もお客様にゆっくりとあじさいを味わってほしいという理由からである。

このガイド活動で感じたことは、お客様を楽しませるように努力をしてガイドを行っているということである。また、お客様の体調を気遣うといったケアもきちんと行っていた。

(2) 大正大学社会教育計画論 巣鴨・駒込街歩き

・事前学習 6月13日

大正大学の授業である社会教育計画論の授業の一環として、としま案内人による駒込と巣鴨の街歩きが企画された。学生の立場として企画に参加をした。

事前知識なしでは、ガイドをしても分からない部分が多いということで、事前学習を行った。ボランティア活動とは何かを考え発表をした後、今回の街歩きのコース説明があり、高橋さん、江原さんを中心に駒込・巣鴨の歴史について学んだ。

コースは大正大学を出発し、染井霊園を通り、駒込の地域文化創造館に到着するというものである。

・社会教育計画論街歩き 6月20日

当日の参加者は14名であり、2班に分けて行動することとなった。天気が雨であったため、傘を差しながら移動することとなり、不便な点があった。

街歩き自体は問題なく進行し、学生も事前学習があったためか説明を理解できて



写真1. 家系図を使い説明するとしま案内人

いるように感じた。また、仏教学科の学生から案内人でも知らない情報の指摘があった。

駒込地域文化創造館に到着後、今回の授業のまとめミーティングを行った。学生からは、ガイドをするための工夫の素晴らしさや案内人の持っている膨大な知識量に驚かされたといった感想があった。

また、地域の住民が地域の歴史を学び、今回のように後世の人に伝えていく事の大切さも意見として出た。

としま案内人からは、学生と歩くことで新たな発見やシニア層との興味を引く部分の違いを学ぶことができたといった意見があった。今回の街歩きは学生とシニア層との交流といった一面もあり、双方にとって有意義な街歩きであったと考えられる。



写真2. 事後学習会・振り返りの様子

(3) JICA ガイド 7月14日

国際協力機構 JICA の事業で日本を訪問中の 14 カ国 16 名の外国人に皇居東御苑を案内した。としま案内人の中の英語部会が中心となった活動であり、ガイドは全員で 11 名参加し、写真や絵、身振り手振りでわかりやすく表現をしていた。

私も初めてガイド役として参加をした。私は英語が殆ど話せないが、手書きのカンペと英語部会のサポートもあり、なんとか相手に理解してもらうことができた。としま案内人としても初めての試みであったため、探りながらのガイドであったと感じる。

私のこれまでの大学生活の中で JICA のような方々と接する機会は殆ど無かったため、貴重な経験となった。



写真3. 皇居での集合写真

(4) 学生ガイドプロジェクト

JICA のガイド経験から、学生がとしま案内人と繋がりながら地域ガイド活動を行うことで、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけることができるのではないかと考えた。そこで、私は学生が地域ガイドを行う学生組織を作ることによって、それを実現できるのではないかと考えた。

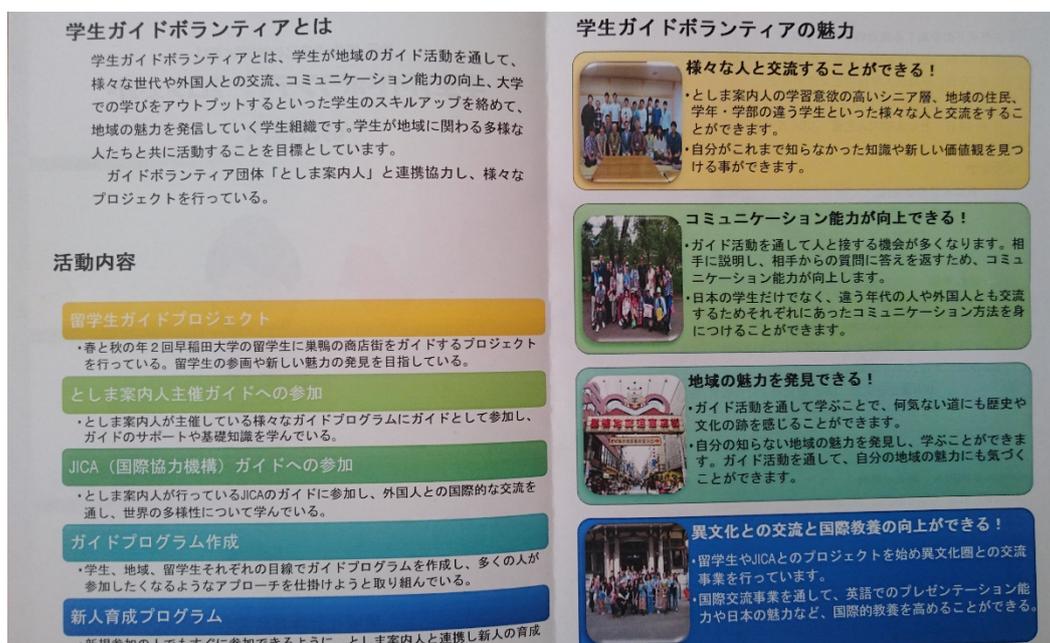


写真4 学生ガイド募集のパンフレット

写真4のパンフレットを作り、大正大学の学生に呼びかけを行った。呼びかけの際に掲げた学生ガイド活動の魅力は以下の通りである。

1) 様々な人と交流することができる

としま案内人の学習意欲の高いシニア層、地域の住民、学年・学部の違う学生といった様々な人と交流をすることができる。自分がこれまで知らなかったことや新しい価値観を見つける事ができる。

2) コミュニケーション能力の向上

ガイドを通して人と接する機会が多くなる。相手に説明し、相手からの質問に答えを返すため、コミュニケーション能力を向上させることができる。

日本の学生だけでなく、違う年代の人や外国人とも交流するためそれぞれにあったコミュニケーション方法を身につけることができる。

3) 地域の魅力を発見できる

ガイド活動を通して学ぶことで、何気ない道にも歴史や文化の跡を感じることができるようになる。自分の知らないその地域の魅力を発見し、学ぶことができる。

4) 異文化との交流と国際教養の向上ができる

留学生やJICAとのガイドプロジェクトをはじめ異文化圏との交流ができる。

国際交流事業を通して、英語でのプレゼンテーション能力や日本の魅力の再発見、国際的教養を高めることができる。

このような魅力を掲げて、大正大学を中心に呼びかけを行ったが、私の説明不足も起因してか、団体への参加者を確保することはできなかった。だが、学生が社会へ出るために必要な能力であると考えているため、大正大学のみでなく、豊島区の各大学と連携したいと考えている。

(5) 西巣鴨周辺ガイド 10月12日、10月13日

二日間に分けて西巣鴨周辺のガイド散策を行った。12日は7名、13日は13名の参加者であった。コースは全養寺をスタートし、大正大学で途中休憩を入れ、庚申塚に向かうコースである。当日は私以外の大正大学の学生も参加し、大正大学を案内する際は、サポートもしていただいた。

普段は入ることのできない全養寺の閻魔堂に特別に入れていただき、間近で3メートルの閻魔様を見ることができた。外から見て話すよりも迫力が伝わりやすく、このようなサプライズもガイドの一つの魅力であると感じた。



写真5. 全養寺の閻魔堂でのガイド



写真6. 大正大学のサザエ堂のガイド

(6) 早稲田大学留学生プロジェクト

1) 企画打ち合わせ 10月16日、10月23日

早稲田大学の留学生を日本文化理解の一環で巣鴨のまち歩きをする活動（早稲田大学の正課授業）があり、そのガイドを行う依頼があった。

この「留学生ガイドプロジェクト」を進めていくため、関係者の顔合わせと事前打ち合わせを行った。打ち合わせの中では、前回のようについでに団体で行動せずに個別のグループに分けることや事前学習を行うことについて話し合った。

今回の留学生ガイドは早稲田大学の授業の一環であるため、時間が決まっており、グループとの綿密な打ち合わせが必要だと感じた。

2) 留学生との事前学習 10月30日

事前学習会は雑司ヶ谷の地域文化創造館で行われた。留学生は午前と午後それぞれ35人で、計70人の参加であった。事前学習会の進行は、まず私から今回のガイド目的を簡単に説明し、石田先生による巣鴨についての説明を行った。その後、留学生をグループ分けし、グループ内でガイド当日に見て回るテーマと見る場所を話し合いながら決めてもらうという構成になっている。打ち合わせ時に事前学習当日

の流れを確認していたこともあり、スムーズに会の進行をすることができた。

留学生の数に対してサポートする大人と学生が少ないことが課題であると感じた。

3) 留学生まち歩き ガイド参加 11月6日

留学生ガイド当日は大雨であったが、大学授業であることから、なかなか中止にできないため雨天でもガイドを行った。集合場所は都電荒川線のホームであり、一時ホームが混雑してしまったが何事もなくガイドは開始することができた。私のグループは午前・午後共にガイド後に授業がなく時間が空いているグループであったためゆっくりとガイドをすることができた。雨の中大変であったが、多くの参加者が楽しんでいる様子であった。

留学生の中には次の時間に授業が入っている学生もおり、急ぎ足でのガイドになってしまったグループもあったなど次回への改善ポイントも幾つか見つかった。

4) 事後報告会・交流会 12月11日

留学生ガイドを行って感じたことを意見交換する事後報告会を開催した。場所は
大正大学の鴨台花壇カフェを貸し切り行った。

早稲田大学の担当教員の先生からは留学生が書いたレポートを持参してガイドとして参加した方に留学生の反応を報告していただいた。大正大学の担当教員である出川真也先生からは今回のガイドに参加した方を対象に行ったアンケートの結果を報告した。学生やとしま案内人からも参加しての感想と次回への問題点を意見交換した。その後は次回からもプロジェクトを行っていくために事後報告もかねて交流会を行った。

全体的に留学生は楽しかったという感想が多く、ガイドして良かったと感じた。また、留学生の側からも時間が短いといった問題点が挙がっていたので解決すべき課題も多いと感じた。しかし、時間の問題を除けばかなりの高評価であったため来年への期待も高く持てるのではないかと感じた。

(7) 鴨台祭での企画活動 11月2日、11月3日

大正大学の文化祭である鴨台祭にガイド活動を活用した企画を行った。鴨台祭では教室内でのポスター発表、パワーポイントを用いた発表の他に、体験企画として大正大学を中心として西巣鴨の周辺の地域ガイドを行った。

西巣鴨周辺ガイドでは鴨台祭当日が土曜日と日曜日であったこともあり、お寺を案内した際に法事が行われていた。その際サポートで参加して下さっていた豊島案内人の五十嵐さんに手助けしていただいた。まだガイドとして1人で案内できるほどには成長していないと感じた。また、移動中には自分の中の情報量が少ないために無言で移動してしまうことが多くあった。案内する場所に関する情報を仕入れておくべきであったと感じた。

(8) JICA ガイド 11月10日

飛鳥山から巢鴨商店街にかけて JICA の外国人をガイドした。このガイド活動では普段よりも説明部分を少なくし、巢鴨商店街で自由時間を設けた。ガイドの最後には巢鴨の地域文化創造館で豊島案内人のシニアの方々に JICA からインタビューをする時間があつた。

英語ができなかつたためおどおどしてしまつたが、担当の庚申塚ではきちんと相手の反応を確認しながらガイドをすることができたと実感している。また、今回のインタビューは JICA 側から話があつて実現したものである。としま案内人の国際交流が一層深まっていると感じた。

(9) 留学生餅つきガイド 11月25日

帝京大学や早稲田大学等の留学生に巢鴨・駒込をガイドした。今回のガイドのメインは「染井よしの町会」が行っている餅つき大会の参加であつた。留学生が11名の参加であり、複数の班に分けてのガイドであつた。私の今回は役割は写真の撮影であつたが、グループ内では私もガイドをすることを考えていたために齟齬が生じた場面もあつた。

餅つき大会は留学生に好評で参加したとしま案内人のメンバーも楽しんでた。留学生からは楽しく学ぶことができ良かったとの評価を頂くことができた。

今回は留学生が対象だつたため、同年代である学生がいたことで、より楽しく会話しながら案内できるのではないかと考えられる。日本人学生の側も国際交流を経験することができたことから、良い関係性を築くきっかけとなつたのではないかと考えられる。



写真7. 餅つき大会に参加する留学生

(10) 実践研究 東京ラウンドテーブル（東京学芸大学）での報告 12月22日

東京学芸大学で行われたラウンドテーブルに参加をした。私は学生の地域ガイドについて発表を行った。地域のために学生がガイドを行うことは地域理解にとって良いことであるなどの意見を頂いた。

しかし、私の学生ガイドの構想も学生と地域のモデルも私だけの参加ではなく、実際に学生ガイドを組織して運営してみなければ分からないとの指摘も受けた。良い意見と共にこれからの課題を発見することができた貴重な機会であつたと感じる。

6. 成果

(1) 身近な学びから得られたこと

実習を通して大学では経験することのできない体験をすることができた。元気なシニアの方々との交流、JICA や留学生との国際交流、ガイド企画に参加するお客様

との交流とガイドを通して様々な方との交流をすることができた。同年代の学生と違い別の視点をもっているため、より詳しい地域の歴史や社会教育の知識を獲得することができた。

また、地域を伝えるガイド活動を通して、地域との繋がりを深めることができるようになったと感じている。自分の通っている大学の地元について実習当初は殆ど何も知らない状態だった。しかし、実習を続けていくうちに地域の歴史を学び、大学の地元について知ることができた。同時にそのような歴史を調べ、受け継いでいく地域の次世代の育成が必要であると考えた。

(2) 地域学習団体とガイド活動へのインパクト

学生が地域ガイドに参加することによって、これまでよりも活動の幅が広がって行くきっかけにしてもらえればと考えた。通常行っているガイドコースを学生目線から評価することは、新しい取り組みを再構築することにつながるのではないか。そうすることによって、地域ガイド自体にさらなる膨らみができ、さらに充実したものになる可能性がでてくるのではと考える。

地域の歴史を伝えていく側である地域ガイド活動に学生が参加することによって、その後の会のメンバーを確保できるメリットもあるだろう。また、地域の歴史を伝えていくための担い手を育成することもできるといったメリットもある。

学生の参加は会全体のメリットと共に地域全体のメリットにも繋がっていくのである。

7. 考察・明らかになったことー地域の次世代育成モデルの提案ー

地域における次世代の育成はその地域が続いていくのに必要である。次世代の語り部がいなければ地域の歴史と共に地域全体が風化してしまう。また、地域を盛り上げていく若者の存在は次のステップに進むために必要であると考えた。今回の取り組みをベースにして、私は図のような地域の次世代育成モデルを考えた。

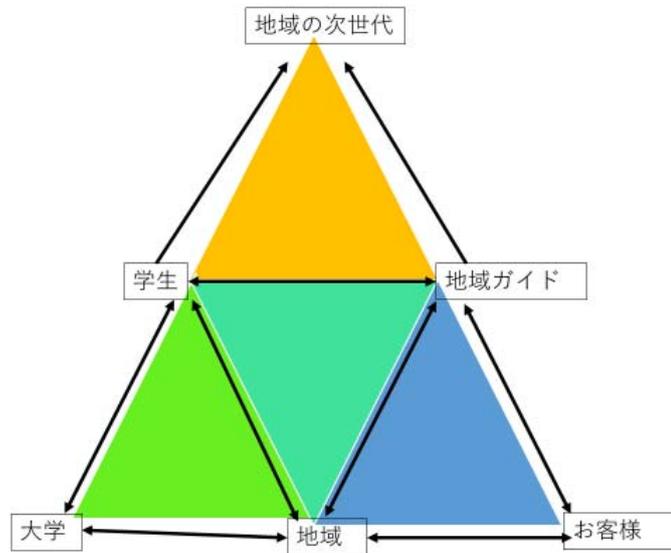


図1. 地域の次世代育成モデル

このモデルは、地域に関わりを持っているもの同士が繋がりを持つことによって、同じ目標へと到達することができることを表す図となっている。今、機能しているとしま案内人の関係性の中に学生が繋がりを持つことで、学生自体の繋がりや広がりと共にとしま案内人側にも大学との繋がりやすくなるといった双方向の利点が生じる。最終的に両者との関わりを持って活動をしていくことによって、次世代の育成という目標到達へ近づいていくのである。

としま案内人に参加されている方々は皆学習意欲が高く、参加当初は驚くことが多くあった。学ぶだけでなく、ガイド活動による実践を行うことによりその知識をただ蓄えておくだけでないことも理解し、改めて地域ガイド活動における学びと実践という学習の形に感銘を受けた。また、最近組織された英語部会に代表される JICA や留学生のガイド活動への展開のように、さらに新たな活動の幅を広げようとする行動力にも驚かされた。生涯学習団体として、このように学習とアウトプットが両立できることこそ重要なのではないだろうか。

【謝辞】

本実習を行う機会を与えてくださった大学関係者の皆様、実習を行うにあたり協力をしてくださった五十嵐さん、としま案内人の皆様、早稲田大学の森下先生にこの場を借りて感謝申し上げます。実習で学んだことを今後役に立てていきたいと思えます。

【参考文献】

としま案内人 HP <http://toshima-guide.com/> 2019年2月20日閲覧

岡本薫 「新訂入門・生涯学習制作」 一般財団法人日本青年会 平成16年1月25日

参考文献、を示しましょう。一覧を入れ込むこと 最低でも5,6冊あるはずです。あと、
としま案内人の URL 等を示して提示しなければなりませんね。

【 I. 実習報告 3 豊島区スポーツ推進委員協議会 区民ひろば他 】

地域における健康・スポーツ学習の可能性

人間科学科 4 年 水野梨奈



【キーワード】

高齢者 若者 スポーツ活動 コミュニティ

【概要】

実習を通して、高齢者の地域のスポーツ活動について学び、コミュニティの重要性を考えた。さらに、スポーツを通じて現在のコミュニティに、若者を参画させることによって、新たな多世代型コミュニティを生み出すことができると考察した。

1. 背景

我が国では 65 歳以上の一人暮らし高齢者の増加が進んでいる。内閣府の平成 30 年版高齢社会白書によると、65 歳以上の一人暮らし高齢者の増加は男女ともに顕著であり、昭和 55 (1980) 年には男性約 19 万人、女性約 69 万人、高齢者人口に占める割合は男性 4.3%、女性 11.2%、であった。平成 27 (2015) 年度には男性約 192 万人、女性約 400 万人、高齢者人口に占める割合は男性 13.3%、女性 21.1%となっている。多くの時間を一人で過ごす高齢者が多く存在するため、高齢者のためのコミュニティ作りが必要になると考える。

そのコミュニティ作りの一つがスポーツであると考え。広辞苑によれば、「スポーツ」とは、①運動競技、②気晴らしと記されている。スポーツは身体運動だけを示すのではなく、非日常活動であり、レクリエーションでもある。また、師岡 (2010) によると、「生涯スポーツ」とは、誰もが生涯の各時期にわたって、それぞれの体力や年齢、目的に応じて楽しむことができるスポーツである。

いつでも、どこでも、主体的にスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会の実現は我が国において重要な政策課題になっている。内閣府の「体力・スポーツに関する世論調査」では、この 1 年間における運動・スポーツの日数を聞いたところ、18 歳 19 歳を除いた成人の週 1 日以上の上の運動実施率は 51.5%となっている。このことから、運動・スポーツを実施している人がまだまだ少ないと考えられる。

私自身スポーツジムのアルバイトの経験から、多くの年代がスポーツを楽しんでおり、その中で小さなコミュニティが存在していることを目の当たりにした。しかし、スポーツジムだけではなく、高齢者が多く通う生涯学習施設やその他のスポーツ活動でも、それができると考える。生涯学習施設やその他のスポーツ活動において、幼児から成人・高齢者まで幅広い年代と一緒にスポーツを楽しむことで、より多様なコミュニティを作ることができるのではないかと考えた。

2. 目的

当実習では、全世代の中で一番健康意識が高い高齢者の地域のスポーツ活動について学び、新たなスポーツ活動の在り方を提案することを目的とした。

3. 実習先の概要

(1) 区民ひろば南池袋

区民ひろば南池袋は、平成 30 年 4 月より、NPO 法人みみずくの杜が運営している施設である。自主サークル活動では、コーラス、体操等、文化や運動活動が盛んで、介護予防のための様々なプログラム（りらくくす気功・ミュージックセラピーなど）も豊富である。

(2) 区民ひろば清和第一

区民ひろば清和第一はことぶきの家として長年高齢者の憩いの場であり活動の場として親しまれてきた。しかし、年齢や使用目的によって制限された施設から年齢を問わずだれで

も有効に利用できる施設「区民ひろば清和」として平成19年4月1日にオープンした。施設の運営にはNPO法人ひろば清和があたり、関係町会、地域の民生児童委員、ひろばの利用者、育成委員、PTA関係、個人が参加し、それぞれが専門部門に分かれて年間の行事目標を立て活動を進めている。施設を利用されている方々のご意見を取り入れながら誰でもが参加、活動できる地域のコミュニティの場としての施設になることを目的としている。

(3) 豊島区スポーツ推進委員協議会

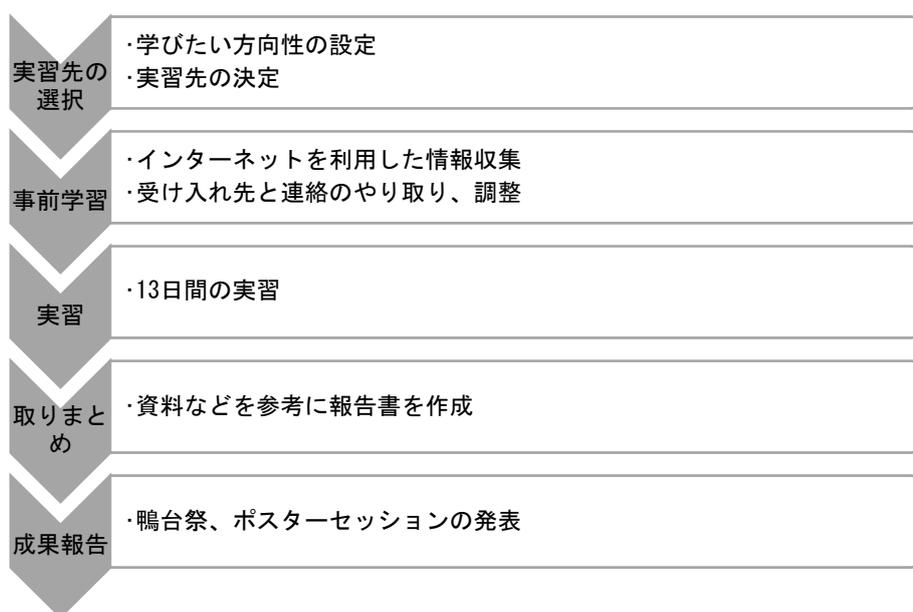
豊島区スポーツ推進委員協議会は、豊島区より委嘱された非常勤職員である。スポーツ・レクリエーションの普及振興のため、地域におけるスポーツ活動の指導助言と区のスポーツ・レクリエーション関係行事に対する企画や運営などをおこなっている。『総合型地域スポーツクラブ』の育成に向けて、中心的な役割を果たすために、研修を経て現在、西巣鴨中学校の校庭と体育館を使用し、西巣鴨中学校地域スポーツクラブとして、4種目が行われている。

(4) みらい館大明

みらい館大明は平成15年に豊島区立大明小学校が閉校となり、空施設を利用した施設である。現在、地元有志の方々で構成されたNPO法人いけぶくろ大明によって生涯学習施設として管理・運営が行われている。

みらい館大明は、主に地域づくり事業、「学び」に関する事業といった2つの事業を中心に展開されている。地域づくり事業は、さらに3つに分類され、地域交流イベント、施設の貸出事業、防災拠点といった事業から構成されている。「学び」に関する事業では、子どもの健全育成、若者支援事業、シニア対象事業、生涯学習講座、国際交流などのさまざまなジャンル・年齢層に向けた講座、イベントが行われている。

4. 実習プロセス



(1) 事前

春学期 生涯学習施設講座（講座）

8月2日：木津美佳様 事前相談

9月6日：みらい館大明 事前相談

(2) 事中

8月24日：筋トレ脳トレ・スマイル体操

9月12日：元気はつらつ体力UP！

9月25日：子ども器械体操教室

9月26日：元気はつらつ体力UP！

9月28日：スマイル体操

10月8日：豊島スポーツまつり

10月10日：ポッチャ

10月26～29日：大明まつり

11月11日：区民ハイキング

11月17日：ポッチャ

(3) 事後

11月2・3日：鴨台祭 模造紙展示

11月10日：早稲田教育フォーラム ポスターセッション発表

5. 実習内容

(1) 筋トレ脳トレ・スマイル体操、元気はつらつ体力UP！

区民ひろば南池袋では、「筋トレ脳トレ・スマイル体操」に参加し、区民ひろば清和第一では、「元気はつらつ体力UP！」に参加した。

実習内容は2点あった。1つは、椅子の片付けのお手伝いであった。講座が終わると区民ひろばの従業員の方が外で待機していた。区民ひろばの従業員の方と、講師の先生と、利用者の方とみんなと一緒に椅子の片付けを行った。

もう1つの実習内容は、高齢者の方と一緒に参加し、見て学んだことである。講座の流れは、最初に準備体操で体をさすった。そして、タオルを使って筋トレやスクワットなどを行った。その後に、音楽に合わせてウォーキングや、タオルでボールを作ってボール遊び、グー・チョキ・パーのような手を使って脳トレを行った。他にも、音に合わせてポケモン音頭を踊った。参加者の方は生き生きと体を動かしていた。

最後の講座の実習では、手遊びを講師としてやらせてもらった。「もしもしかめよ」の歌を歌いながら、グー・チョキ・パーを交互に繰り返すものである。実際にやってみると意外と難しく、利用者の方の前で行うと思うと、緊張して間違えそうだった。しかし、本番では、間違えたこともあったが、利用者の方は優しく見守ってくれた。利用者の方はすごく暖かく接してくれる方が多くいた。

講座の中で重要視していることは身体をたくさん動かすことではなく、声を出すことであった。これは、筋トレ脳トレ・スマイル体操、元気はつらつ体力 UP! の講師である木津美佳先生に教わった。声を出す機会がないと、のどが弱くなってしまい、ものが食べられなくなってしまうからだという。木津先生の声も大きいため、参加者の方の笑い声も多く、部屋中に笑い声が響いていた。

講座の参加者にお話を伺ったところ、私はスポーツジムとは違う目的で来ている人が多いと感じた。なぜなら、参加者は運動することよりも人に会うことを重視していたからである。スポーツジムでは、健康目的で運動をする人が多く、人に会うことは副産物と考えている人が多くいる。反対に、生涯学習施設で講座を受けている人は、人に会って話したいという人が多く、運動することで健康になることは副産物として考えている人が多くいた。中には、講座の先生に会いに来ている方もいた。その理由は、生涯学習施設は、スポーツジムよりも一人でやる運動が少なく、多くの人と話しながら行う運動が多いからだと思う。さらに、難易度もスポーツジムよりも簡単に行えるようなものばかりであったため、参加しやすいからだと考えた。

(2) としまスポーツまつり

豊島区スポーツ推進委員協議会が主催である。豊島区立総合体育場&朋有小学校校庭を使った。午前は周りを見て回った。午後は 50m 走のお手伝いをした。

場所が大きく分けて 2 つに分かれている。青空ひろばとチャレンジひろばである。青空ひろばでは、豊島区立総合体育場を使い、青空スポーツ、青空ステージ、展示ブースがあった。チャレンジひろばでは、朋有小学校校庭を使い、ボッチャ、体力測定、NO LIMITS CHALLENGE が行われた。

NO LIMITS CHALLENGE とは、都内各地で展開している東京都主催のパラリンピック体験プログラムである。競技体験のほか、競技紹介パネルや用具等の展示、ゲストアスリートのトークショーなどを通して、パラリンピックの魅力を体感できる。豊島スポーツまつりでは、5 人制サッカー、トライアスロン、テコンドーの体験が行われており、パラリンピック選手の木村潤平選手(トライアスロン)、阿渡健太選手(テコンドー) が来ていた。

9 時から準備が始まった。ステージではリハーサルが行われていた。ブースを担当している方は、落ち葉拾いやチーム内でのルール確認だけでなく、配置の確認や場所の調整も行っていた。なぜなら、食事を取る場所が決まっているのに様々なところで食べる人がいることを予測していたからだ。そのため、テントをずらし、シートを引き直していた。

9 時 45 分に開場した。ステージ、走り方教室、キックターゲットから人がどんどん入っていった。2 歳～小学生の子どもが多く、次に高齢者が多かった。ステージにはトシマッハという戦隊ヒーローもいたため、子どもたちが多く見に来たのだろうと考えた。

午後は 50m 走のお手伝いをした。50m 走の担当は、主に陸上競技会、豊島区体育指導マスタース・クラブに所属している方が行っていた。作業は 3 つあった。①スタンプラリーの用紙の回収、②50m 走の結果を記入すること、③走った人数と 50m 走の記録の記入であ

る。50m走は、年代問わず多くの人に参加していて、中には、親子で走っている人も多くいた。目的も多様であった。記録を出したい小学生や、友達と一緒に走りたい子どももいた。様々な年代がそれぞれの目的で同じ運動をすることができるのは、祭りならではの特徴であると考えた。



写真1 50m走



写真2 走り方教室

(3) ボッチャ

ボッチャとは東京パラリンピックの正式種目の一つである。ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりしていかに近づけるかを競うものである。男女区別の内容にチームに分かれて行われる。

コートは下図のように①～⑥に選手が入り、ジャックボールをジャックボールラインとエンドラインの間に投げる。得点の数は、双方のチームの最もジャックボールに近いボールを比較し、どちらが近いかを判定する。ジャックボールに遠かった方のチームのボールに一番近いボールとジャックボールを結んだ線を半径とし、ジャックボールを中心とした円を描く。その円の中にいくつ、相手ボールがあるかを数える。その数が得点となる。

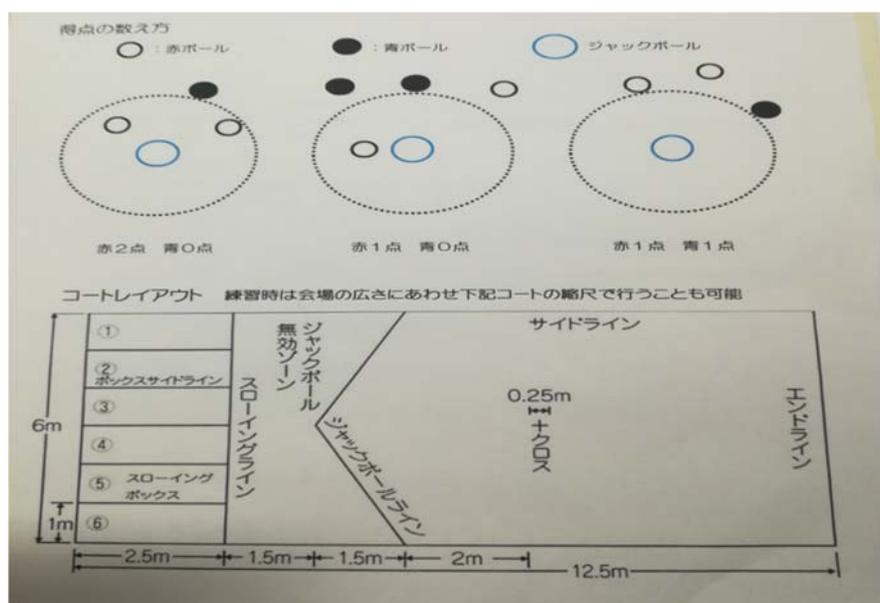


写真3 ボッチャの得点の数え方とコートレイアウト

豊島区では東京パラリンピックに向けて、パラリンピック種目の啓蒙活動を行っている。そのうちの 하나가 ボッチャである。啓蒙活動の一環として、2つの場所に豊島区スポーツ推進委員協議会の方々と参加した。一つは、豊島区立西巢鴨小学校にボッチャを教えに行った。もう一つは、区民ひろばのボッチャ大会の運営である。

豊島区立西巢鴨小学校の小学生に「ボッチャを知っている人はいますか。」と声をかけたところ、約60人中1人しか知っている人がいなかった。それほど認知度は少ないのだと思った。チームを8つに分けて、4つのコートで行った。最初は半信半疑であったが、徐々にやり方が分かってくると、とても楽しそうに遊んでいた。私は、最初そばで盛り上げていたが、途中から審判をやらせてもらった。その時、私も初めてボッチャを体験したため、助けをもらいながら審判をした。しかし、ルールが単純明快なため、2回目からは一人で言うことができた。

区民ひろばのボッチャ大会では、高齢者の方が多くいたが、親子連れや若い人が何人かいた。多くの年代が同時に参加できるスポーツであると思った。

作業は、参加賞の取り分け作業や配布、景品の取り分け、会場設営を行った。豊島区スポーツ推進委員協議会の方がチームごとのバンダナを用意していたため、参加者の方々に配ったところ、とてもうれしそうに付けてくれた。これらのことから、ボッチャは多くの年代が楽しく参加できるスポーツであると思った。



写真 4,5 ボッチャの様子

(4) 区民ハイキング

毎年、豊島区スポーツ推進委員協議会が主催しているハイキングである。今年は多峯主山・天覧山をハイキングした。行く順番は、多峯主山、雨乞池、見返り坂、飯能笹の群落、天覧山、十六羅漢像、能仁寺、小町公園である。

私はハイキングの途中参加者の方に積極的に話しかけた。参加者の目的はハイキングが好きという方もいれば、興味があって参加したという方もいて、人それぞれであった。しかし、筋トレ脳トレ・スマイル体操、元気はつらつ体力UP!のような生涯学習施設の講座と同じように、人との繋がり、コミュニケーションを求めている人が多くいると感じた。というのも、私が積極的に話しかけると、笑顔で答えてくれる人が多くいたからである。

さらに、お昼ご飯を食べるときも、参加者の方が一緒に食べようと誘ってきてくれた。そのため、ハイキングが一番の目的ではなく、人とのコミュニケーションを目的にきてきている人が多くいることが分かった。



写真6 準備体操



写真7 山登り

(5) 子ども器械体操教室

みらい館大明で行われた。主催はNPO法人子どもの身体能力開発協会である。幼児と小学校低学年(最高9歳)、小学校高学年(最高11歳)を担当した。

作業としては、道具運び、月謝の振り分けをした。道具は、コーンなどの軽い物から、跳び箱などの重いものまで運んだ。

高齢者と違い、体育の授業などで困らないように、体の機能を向上させることが目的であった。年代に応じて話し方や行う内容を変えていた。準備体操して、小学校低学年はグループに分かれて直線を走るようなことを行ったが、小学校高学年は、鬼ごっこやサッカーを行っていた。

どの年代も跳び箱を使った器械体操を行った。幼稚園児は自分で並ぶことができないので、並ぶように促しながら、跳び箱に乗ることを行った。小学校低学年は、跳び箱を飛んでいた。小学校高学年は、跳び箱の段数を変えて、でんぐり返しなどを行っていた。年齢が高くなるほど、グループ間による能力の差は激しかった。しかし、差を埋めるために、できない子は一生懸命取り組んでいた。

(6) 大明まつり

ボランティアとして計4日間参加した。1日目は祭りの準備をした。2, 3日目は祭りのお手伝いをし、4日目はアンケートの集計を行った。

1日目の準備は会場準備、設営を行った。板の取り付けや体育館の紅白幕の取り付けを行った。この日は他の団体の方も準備をしていた。そのため、思ったより設営や紅白幕の取り付けに時間がかかってしまい、夜遅くまでかかった。

2, 3日目の祭りは子どもアートエリアで割りばしタワーと的あてゲーム、お絵かきを

行った。割りばしタワーは記録を書いた。子どもたちは夢中になっていた。1日目は土曜日だったこともあり、友達と一緒に来ている子や保育園の団体客が多くいた。2日目は親子連れが多く、1日目よりも人が多く来館した。保育園や小学校に通っている子どもたちは、自分の絵がこの祭りで飾られているため、親子で見に来ていた人が多くいた。その暇つぶし時間として、子どもアートエリアが利用されていた。4日目はアンケートの集計を行った。

この祭りを通して、多くの人とコミュニケーションが取れたため、新たな価値観を増やすことができた。さらに、このような廃校を使った祭りに初めて参加したので、祭りの準備や流れがわかった。祭りにどんな方が来るのか、そのために何をすればいいのかと話し合っている姿が多く見られた。祭りを成功させたいという思いで関わっているのだと考えた。

そのため、大明まつりは、様々な所から人が集まってきていたため、ボランティアの数が多く、活気があった。それもみらい館大明の職員の方が信頼されているから、多くの方がボランティアとして参加していると思った。さらに、年代に合わせた催し物や展示があり、様々な年代の方が楽しめると思った。



写真8 子どもアートエリア



写真9 子どもたちが作った作品

6. 成果

(1) 新たな価値観を得る学びとして

今回の実習では、様々な場所に行くことができたため、多くの人と会話することができ、新たな価値観を持つことができた。例えば、ハイキングの時に一緒に昼食を取った女性と話した時に、人生経験やこれからの社会問題について話した。さらに、早稲田教育フォーラムでは、千代田区の現役の議員の方のお話を伺うことができた。その方々の今までの人生経験から、こんな生き方があるのかと感銘を受けることが多くあった。

さらに、なかなか普段の生活で関わらない所に行ったため、グループや施設の良さを実感することができた。例えば、区民ひろばのプログラムやハイキングでは、スポーツジム

とは違い、運動だけではない人とのつながりを求めていることに気づくことができた。大明まつりやとしまスポーツまつりでは、「祭りにどんな方が来るのか、そのために何をすればいいのか。」と話し合っている姿が多く見られた。どんな時でも相手のために考えて行動している姿が印象的であった。ボッチャや器械体操では、私の知らないニュースポーツを行っていた。そのため、新たなスポーツの楽しみ方を知ることができた。すべての実習において学びがあったことに感謝している。

(2) 実習先への寄与について

人手不足解消につながったと考えられる。豊島区スポーツ推進協議会では、団体の中の知人の紹介でしか入ることができない。そのため、入会することが難しく、人手も減っている。

また事業への理解を深めるきっかけづくりになるのではないかと考えられる。ボッチャの実習の時に、私はボッチャのことを何も知らなかったので、ボッチャの説明が書いてある紙をもらった。その紙を作成することで、より自分たちの事業のやりがいや目的を改めて確認する機会としていただけたのではないかと考える。

(3) 地域社会について

高齢者が元気になることで、師岡 (2010) は、①人々の健康の質 (身体的・精神的・社会的に良好な状態) を高める。②コミュニティの再興、活性化に役立つ。③生産性を向上させる。④医療費の低下をもたらす。⑤多世代の交流をもたらすことを示している。

実習の経験から、区民ひろばのプログラムやハイキングでは、人とのつながりだけではなく、介護予防のために参加している方もいた。そのため、①、③や④の効果をもたらす。

私自身参加者の元気な姿に感銘を受けた。自分の将来もこんな元気に笑って過ごしたいと思った。そのため、②と⑤の効果をもたらす、さらに発展していくと考えられる。その結果、①～⑤のすべてが社会に影響していると考えられる。

7. 考察と提案

(1) 高齢者の学習の特徴とニーズ

マクラスキー (McClusky, H.Y.) は 1971 年のホワイトハウス・エイジング会議のバッググラウンドペーパーの中で高齢者の教育的ニーズについて言及した (小池 2010)。その中で彼は、①対処的ニーズ：高齢期の生活に対処していくのに役立つ知識や技術、②表現的ニーズ：活動それ自体の中に見出される喜びへのニーズ、③貢献的ニーズ：高齢者が他社や地域のために役に立つ活動に参加しこれらに貢献することで、周りから認められたいというニーズ、④影響的ニーズ：自分の生活環境により大きな影響を与えたいというニーズ、⑤超越的ニーズ：高齢期に生理的機能の低下や、社会的役割が減少したとしても、なおかつ精神的に伸び続けたい、何らかの形で過去の自分以上の存在でありたいというニーズの

5つを示している。

エリクソン (Erikson, E.H.) のライフサイクル論では、生涯を8つの段階に分けている。そのそれぞれの段階においてその発達段階固有の葛藤が生じるとした。老年期においては、統合性と絶望という葛藤が生じる。齋藤 (2008) によると、高齢期は、それ以前の各段階から獲得してきた能力や特性、社会との関わり合いが衰退する。さらに、限られた未来への不安と同時に死は免れないものであるという事実と直面する時期でもある。これらの高齢者の特徴となる発達課題において、エリクソンは、これらの「絶望」につながる現象を含め、自身の今までの人生を見直して価値と意義を見出し、新たな目的を発見して「統合する」ことを一つの考えとしている。高齢期を生きていく際の良きモデルとしてだけでなく、高齢者にとっても自分のための活動を誰かのための活動へシフトすることは、新しい公共の「地域の課題等を解決していくタイプに繋がっていくだろう」としている。

(2) 若者の学習の特徴とニーズ

現代社会の高度化、複雑化に伴い一人前の職業人、社会人になるための教育・訓練期間の延長が指摘されて久しい。このため、早く青年期に入るにもかかわらず、いわゆる青年期を過ぎても独立した成人としての役割や責任を持たない若者が増加している。

リンデマン (Lindeman, E.C.) の「成人教育の意味」、そしてノールズ (Knowles, M.S.) の「成人教育の現代的実践」では「学習者」としての成人の特徴として次のことが指摘されている。①成人は学習において自己主導性を志向する存在である。②成人の蓄積した経験は学習の貴重な資源となる。③成人の学習へのレディネス (準備できている状態) は、社会的役割又は社会的発達課題を遂行しようとするところから生じることが多い。④学習の方向付けとしては、生活していく力やすぐに役立つ知識や技能が求められる。⑤成人学習の動機付けは、外在的なもの (資格取得、お金、仕事など) と内在的なもの (興味関心、自己実現、チャレンジ、社会的欲求など) に分類される。その中でも、③～⑤は、成人学習の特性であり、学習ニーズであるといわれている。

小池 (2010) によると、成人の発達には①成人が置かれた環境の中でそのような経験をするか、②成人自身がそこでの経験をいかに認識・解釈するかによって決定される、としている。成人が自らの認識の枠組みでは対応できないことが起こったことに葛藤や矛盾が生じるとき、それを乗り越えるために成人は新たな諸条件や課題に合わせて修正し、再構築しようとする。このエネルギーこそが成人の発達を促す機動力となり、学習の動機付けが生じるというのである。

表1 若者と高齢者の特性と学習ニーズ¹

	特性	学習ニーズ
若者	① 学習において自己主導性を志向 ② 蓄積した経験は学習の貴重な資源 ③ 社会的役割又は社会的発達課題 ④ 生活力やすぐに役立つ知識や技能 ⑤ 外在的なものと内在的なもの	③社会的役割又は社会的発達課題 ④生活力やすぐに役立つ知識や技能 ⑤外在的なものと内在的なもの
高齢者	自我の統合 絶望	① 対処的ニーズ ② 表現的ニーズ ③ 貢献的ニーズ ④ 影響的ニーズ ⑤ 超越的ニーズ

(3) 今後出てくると思われる課題と今後の展望

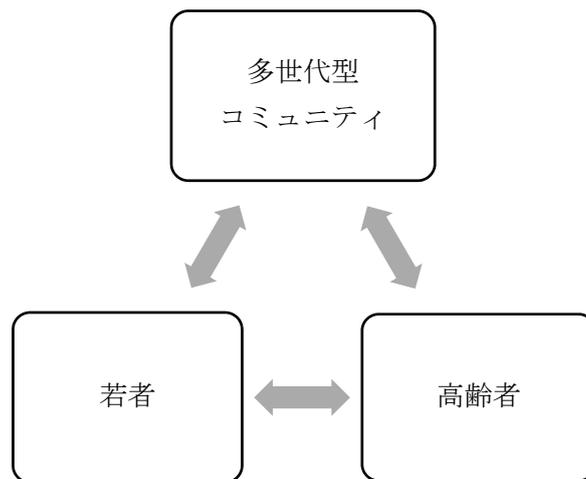


図1 多世代の協働によるコミュニティの再構築

課題は、まだまだ高齢者と若者の学習ニーズが満たされていないことである。そのため、高齢者や幼児だけではなく、社会人や大学生などの若者から中高年者までの年代も生涯学習を行えるように工夫することで学習ニーズが満たされると考える。小池（2010）も、高齢

¹小池茂子（2010）「新訂生涯学習概論」伊藤俊夫（編）第5章2 学習者の特性第5版 112-113 株式会社ぎょうせい

齋藤静（2008）高齢期における生きがいと適応に関する研究—ネットワークの視点から— 現代社会文化研究 **41** 63-75

者を対象とする学習支援は今後、学習者たる高齢者自身が直面する高齢期の危機の解決を支援しつつ、若い世代も巻き込んで我が国の超高齢社会を支える新たな文化を創り出すことへ展開を図ることが重要となると言えるだろうとしている。

若者の特徴の中に、アイデンティティの確立がある。アイデンティティを確立するためには、同じような年代と話すだけではなく、様々な年代の方と話すことが大事だと考える。そうすることで、より確立したアイデンティティを形成できると考える。さらに、成人の特徴の中に、親密性がある。柔軟な人間関係を構築するにあたり、様々な年代の方と話すことで、先人の知恵が得られると考える。

現在の生涯学習では、①対処的ニーズ、②表現的ニーズは満たされているが、③貢献的ニーズ、④影響的ニーズ、⑤超越的ニーズが満たされていないといったことが多いとされている。それらを満たすためにも、若者と一緒に学習することによって、若者にも寄与することで、周りから認められたいというニーズや、精神的に伸び続けたい、何らかの形で過去の自分以上の存在でありたいというニーズが満たされるのではないかと考える。こうしたことによって、すべての世代のニーズが満たされ、多世代の協働によるコミュニティが再構築されると考える。

多世代のコミュニティを作るためには、生涯学習施設も時代によって変化することが求められると考える。高齢者や幼児だけではなく、社会人や大学生などの若者から中高年者までもそのような生涯学習を行えるように工夫することで、様々な年代の方が生涯学習施設に足を運ぶことにつながると考える。例えば、生涯学習を行う時間をシフト制にして、朝早い時間や夜遅い時間にも行えるようにすることや、内容を若者から中高年向けのものを作る。そうすることで、スポーツジムよりも人との繋がり、コミュニティを求めている人が多いため、若者から高齢者までさまざまな年代が集まる施設になると考える。

さまざまな年代とのコミュニケーションの獲得は、同時に 100 年時代を健康で長生きできる身体をつくっていくことにつながるものと期待される。生涯学習施設の実践が盛んになることは、新たなコミュニティが生まれ、さまざまな年代の学習ニーズが満たされることにつながるのではないかと考えるのである。

謝辞

当実習を行う機会を与えてくださった大学関係者の皆様、実習を行うにあたり協力してくださった豊島区体育指導マスターズ・クラブ木津美佳様、豊島区スポーツ推進委員協議会の皆様、各区民ひろば担当職員の皆様、みらい館大明庄司哲夫様にこの場を借りて感謝申し上げます。

実習で学んだ生涯学習の役割や心の持ちようを今後の生き方に役に立て、学び続けていきたいと思っております。

参考文献

- 小池茂子 (2010) 「新訂生涯学習概論」伊藤俊夫 (編) 第 5 章 2 学習者の特性第 5 版 112-113
株式会社ぎょうせい
- 齋藤静 (2008) 高齢期における生きがいと適応に関する研究—ネットワークの視点から—
現代社会文化研究 **41** 63-75
- 師岡文男 (2010) 「新訂生涯学習概論」伊藤俊夫 (編) 第 6 章 6 生涯スポーツの振興第 5 版
150-152 株式会社ぎょうせい
- 内閣府 (2018) スポーツの実施状況等に関する世論調査 (平成 29 年 11~12 月調査) <
http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/icsFiles/afieldfile/2018/03/30/1402344_44_1.pdf>
- 内閣府 (2018) 平成 30 年版高齢社会白書< https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/pdf/1s1s_03.pdf>

【I.実習報告4 玉川上水ネット「玉川上水の自然保護を考える会」】

地域活動から地球環境の保全へ

—玉川上水の自然保護活動を通じて—

心理社会学部 臨床心理学科 4年 篠田 利音



写真1 2018年9月23日 歴史と文化の散歩道～砂川新田発祥の地を歩くコース

【キーワード】

玉川上水・自然環境・環境保全・地域活動・環境学習

【概要】

立川市にある「玉川上水の自然保護を考える会」での実習活動を通して、立川市が行っている環境保全活動に触れながら、地域活動の重要性について検討した。

1. 玉川上水とは

玉川上水は、江戸時代の初期(1653年)に江戸城等の飲料水を供給するためにつくられました。多摩川から取水し、羽村～四谷大木戸までの全長 43 kmあります。また、分水(用水路)として千川上水や野火止用水などがあります。

東京都は 1999 年に歴史環境保全地域として、国は 2003 年に史跡として指定しています。現在では、市民団体「玉川上水ネット」が推進する「玉川上水・分水網の保全活用プロジェクト」が日本ユネスコ協会連盟のプロジェクト未来遺産 2016 に登録されています。

2. 実習先の概要

実習先：玉川上水ネット「玉川上水の自然保護を考える会」

(1) 「玉川上水ネット」の目的

- 1) 玉川上水の豊かな自然環境と景観、及び、生物多様性の保全。
- 2) 玉川上水の歴史と自然、生態系を守り、より良い自然環境を残していく。
- 3) 互いに交流を図ることで、各地の実情を知り、地域の課題について情報交換する。
- 4) 玉川上水に関心のある団体・個人・関係機関との、ゆるやかな連携と交流。
- 5) 安心して住める地域づくり。

(2) 「玉川上水の自然保護を考える会」の目的

玉川上水の自然保護と回復、貴重な歴史土木遺産・生態系の保存の活動を通して地域住民相互の理解を含め連帯を強化し「ふるさとづくり」を推進すること、そして地域から地球環境の保全を考え行動すること。

(3) 活動内容

- 1) 野草の保護・復元—植栽（重点活動地域…稲荷橋—清願院橋間）
- 2) 緑道・法面の清掃、水路内の障害物・ゴミの除去
- 3) 樹名板の取り付け
- 4) 巣箱の取り付け
- 5) カワニナ・ホタルの保全活動・他団体の活動支援

(4) 活動日

- 1) 第 2 日曜日 9:00～11:30
- 2) 第 4 日曜日 13:00～15:30

3. 背景と問題意識

私は小学生の頃から、植物に興味関心がありました。自分の家の近くの駐車場や公園、通っていた学校や近くの河川敷の植物を図書館等で調べていく中で、それらの植物の生育

環境について興味を持ち、環境問題(自然環境)にも興味を持つようになりました。そこで、親と一緒に自分の住んでいる地域(志木市)が行っている清掃活動にも参加することもありました。清掃活動を行うことで地域の自然を豊かにするだけでなく、地域のことを知るといったコミュニティづくりの意味があるのだということを知ることができました。

こうしたことから、地域のことはその地域に住んでいる人が一番知っているのではないかと思うとともに、自分の地域について関心が低下することで地域独自の活動の衰退や地域環境への影響を与えるのではないかと考えました。

環境問題の学習は、生涯学習の中で取り上げられるべき現代的課題の一つとされています。文部科学省(2000)は、生涯学習社会の構築が求められる背景として現代社会の急激な変化に対応するための学習が必要と指摘しています。環境教育は、環境の変化が増すにつれて最も学習していく必要があるものと考えられます。

4. 実習の目的

玉川上水の自然保護を考える会での実習を通じて、玉川上水(立川市エリア)の保全活動を知るとともに、今後の展望(地域の環境保全活動への興味・関心を高めるにはなど)について考察していきます。

5. 実習方法

実習では、立川市の学習等供用施設「こびら橋会館」近くの緑道の清掃活動や除草作業に参加しました。また、体験学習として立川市の砂川地域のイベントにも参加しました。

6. 日程と活動内容

	8月・9月	10月	11月	12月
学習・体験		27日 砂川地域文化祭	18日 立川市民フェスティバル作品展	1日 シンポジウム
実践	8月12日・26日 9月9日・23日 定例活動 (清掃作業)	14日 定例活動 (清掃作業) 21日 「ダンロップ」「日本ユネスコ協会」 との活動 (樹名板の取り付け)	11日 定例活動 (除草作業) 25日 定例活動 (清掃作業)	9日 定例活動 (清掃作業) 23日 定例活動 (清掃作業) 忘年懇親会

(1) 事前

6月17日「シンポジウム 玉川上水の自然を守り育てる～分水網と周辺の緑の保全活用を含めて～」

「玉川上水」について知るため、武蔵野芸能劇場にて開催されたシンポジウムに参加しました。そこで、玉川上水の概要や歴史について学び、分水を引くことで地域を変えていくプロセスを知ることができました。また、国の史跡、東京都歴史環境保全地域である「玉川上水」の自然環境を保護する活動を行っている「玉川上水の自然保護を考える会」の事業方針についても知りました。

シンポジウムに参加して、都内を流れる貴重な自然環境である「玉川上水」に魅力を感じるとともに、小学生の頃に参加した市内の川を含めた清掃活動の経験や自然環境分野の興味から、「玉川上水」をどのようにして保全しているのかを実際に経験してみたいと思いました。また、地域の環境を守ることの意義についても知りたいと思いました。



写真2 2018年6月17日 三鷹駅近くの玉川上水緑道

(2) 事中

8月12日 緑道(上流:こんびら橋～千手小橋)の清掃作業

6月のシンポジウムや事前にインターネット等調べて「玉川上水」と「玉川上水の自然保護を考える会」を知ったうえで実習に臨みました。初めての实習では緑道(上流:こんびら橋～千手小橋)の清掃作業を行いました。作業後、こんびら橋会館にてごみの分別作業(燃える, 燃えないゴミ・ペットボトル・缶・ビン)を行いました。作業終了後、定例会にてこれまでの活動報告に加えて、社会教育主事課程実習学生である私の紹介がありました。

初めての实習を終えて、「玉川上水の自然保護を考える会」が行っている活動の流れを

知ることができ、会員の方々の活気には驚きました。活動を通じて、地域の方だからこそ自然環境の変化等に気づくことができる場所があると思いました。また、活動をするだけでなく、その季節に見られる植物の観察もして「玉川上水」の植物についても触れることができ、改めて自然環境を保全することの大切さを知りました。

8月26日 清掃活動・分別作業と「市民が選ぶ玉川上水・分水網関連遺構」

定例活動では、前回と同じく清掃活動と分別作業を行いました。その後の定例会では、「市民が選ぶ玉川上水・分水網関連遺構」の一覧表についての紹介がありました。

定例会で知った関連遺構について、立川市内に20か所以上の遺構があることに驚きました。また、それぞれの遺構がどのような歴史があり今に至るのか興味をもちました。

定例会での話の中で、なぜこの会に所属しているのかについて話がありました。その話では、地域について知ることの大切さやそれが自分のセカンドライフにどう活かせるのかといった内容でした。私もこれからの人生の中で、自分の住んでいる地域のことについて少しでも知ることが今後の人生をより楽しく生きるために重要であると感じました。

9月9日 玉川上水分水網100選の推薦順位決定と意見交換

定例活動を終え、定例会で先月の玉川上水分水網100選の推薦順位決定(12件の決定)とその意見交換がありました。会長の柴俊男さんによると、市民が自分たちの地域に「お宝」として未来に引き継ぐべきものを自分たちで選ぶことは社会教育の面からとても有意義なものであると示していました。

9月23日 樹名板取り付け担当に

定例活動終了後、定例会では10月21日の「ダンロップ(株)」との作業に向けた人員配置(各作業の担当者)の決定やその他の事項について話し合いがありました。そこで、私は樹名板取り付け担当になりました。この作業は自然観察の条件整備作業ということで、学びを促進する社会教育との関連を感じました。



写真3 2018年9月23日 ヒガンバナ

10月14日 現地観察

定例活動では、清掃作業と次回に向けての現地観察を行いました。その後の定例会では、次回の活動の確認事項と砂川地域文化祭についての紹介がありました。

柴さんによると、普段の定例活動とは違う視点で現地を観察することも大切なことであると示していました。今回の現地観察で、作業前の状況を知ることで作業後どう変わったのか、また変えていくために必要なことや課題が見えてくるのだと思いました。

10月21日「ダンロップ(株)地域貢献自然保護活動」(チームエナセーブ未来プロジェクト)

ダンロップ(株)が行っているチームエナセーブ未来プロジェクトとは、日本ユネスコ協会連盟とともに、100年後の子供たちに地域の文化・自然遺産を継承していく「未来遺産運動」のことで

当日は、ダンロップ(株)70名と会員(玉川上水ネット)30名の計100名が、4チームに分かれて作業(清掃、除草、樹銘板の取り付け)を行いました。私は、10時から11時までの1時間は樹銘板の取り付け作業を行い、そのあと30分は除草作業の方を手伝いました。

樹銘板の取り付けは、緑道の樹木に会員の方が樹木の種類を見分けて樹銘板を取り付けるといった流れで作業を行いました。とりつけた樹木は、コナラ、クヌギ、イヌシデ、ネムノキなどです。作業をする中で、これまで私が活動してきた緑道の樹木の名前を知り、学習する良い機会になりました。

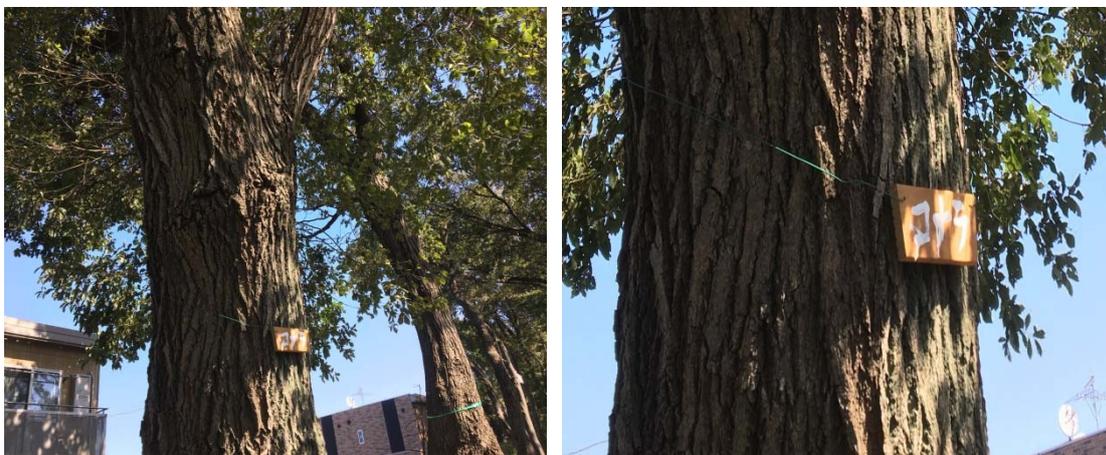


写真4 2018年10月21日 コナラ(樹銘板取り付け後)

環境教育の目標として、人々が環境に配慮して責任ある行動をするといった「環境配慮行動」の考え方があります。富田氏は、環境倫理的な人づくりとして、自然や環境の変化を感じることができる人、自分が自然の一部と認識できる人、多種多様な動植物や生態系を尊ぶことができる人の重要性を挙げています。

霞ヶ浦環境科学センターⁱⁱでは、小野川河口の植物観察を通して、湖に関心を持ち郷土愛を育て、環境を保全する態度を養う取り組みを行っています。また、自然観察会を開き、霞ヶ浦流域の砂丘植物、初夏の里山の植物や生き物の観察を行っています。こうした取り

組みが地域の環境への興味や関心につながり環境保全にもつなげていくために必要な取り組みであることがわかります。

10月27日 「第39回 砂川地域文化祭」

立川市砂川の地域文化祭に参加しました。私が行った27日の文化祭では、郷土の芸能である伝承民謡の「棒打ち唄」や「くるり棒」の展示、地元の人が書いた絵や子ども会の作品展示、玉川上水の自然保護を考える会が担当のなんでも遊び教室(工作教室)がありました。

なんでも遊び教室では、わりばし鉄砲・ネックレス・ぶんぶんごま・紙飛行機などを作る教室で、幼児からシルバーまでを対象に行っていました。私は、わりばし鉄砲、風車、切り抜き飛行機の制作を体験しました。どれも作るのが初めてのものが多かったのですが、大学生の私でも簡単に作れました。その後、わりばし鉄砲作りを地元の子供たちに教えることもしました。

社会教育と工作について、台東区少年少女発明クラブⁱⁱⁱがあります。次代を担う少年少女に対して、科学的興味、関心を高める場を提供するとともに、家庭や学校から離れ、創造・創作活動を通じて発明や工夫の楽しさや、ものを作り、完成させる喜び体験させることを目的としています。

このように社会教育において、工作は工夫することで創造性を高めるだけでなく、子どもたち自身が楽しいと感じ、喜びの感情を育むうえで重要な役割を果たしています。また、工作で培った創造性を環境問題の解決にも応用できるのではないかと思います。

11月3・4日 大正大学「第6回 鴨台祭」

鴨台祭では、社会教育主事課程の実習等の授業の展示や体験スペース、室内演奏(4のみ)を行いました。

実習の展示について、玉川上水のことを知っている方にお会いしました。また、質問として玉川上水の自然保護を考える会の活動範囲についてと自身の今後の地域活動について訊かれました。自身の活動についての一歩として地域のことを知ることが大切だと考えられます。地域のことを知ること、関心を持ち自発的に行動することができるからです。

3日目は、体験として玉川上水の自然保護を考える会の高橋由蔵さんと「ドングリ工作」を行いました。「ドングリ工作」では、「パンダ・ヤジロベエ・ドングリ家族」を作りました。工作で作った作品は持ち帰り可能で、子どもから大人まで幅広い年代の方に楽しんでいただきました。工作の中でも、「ヤジロベエ」は左右のドングリのバランスをとるのが難しく感じました。



ドングリ工作

- 11月4日(日)
- 13:30～15:30
- 10号館 4階

• 1041教室 定員: 20名





写真5 2018年11月4日 鴨台祭 地域社会教育研究会 「ドングリ工作」 宣伝

11月11日 定例活動(除草作業)

今回の定例活動では、除草作業を行いました。この除草作業では、電動草刈機で刈った後の残りの箇所や笹等の除草作業を行いました。また、斜面のあるところでの作業のため、自分の足元に注意しながら作業を行いました。これから育ってくる植物を保全していくためにも、この除草作業は重要であることを改めて実感しました。

11月18日 「第61回 立川市民文化祭 市民文化フェスティバル2018」

立川市民文化フェスティバルでは、各文化会やクラブの絵画や刺繍作品、盆栽などの展示がある作品展とドングリ工作と水墨画が体験できるワークショップがありました。

私は、ワークショップで水墨画体験をしました。この体験では、年賀状のデザインをもとに、2019年の干支であるイノシシや獅子舞などの水墨画を描きました。墨を使って、絵を描くといったことは初めての経験でしたが、墨の使い方を講師の方が教えてくださり、作品を作ることができました。

今回の活動をきっかけに、自分の地域でのこうしたワークショップとしてどんなことを行っているのか関心を持つとともに、こうしたワークショップや作品展の存在を知ることが地域のことを知るうえで重要な役割を果たしていると思いました。



写真6 2018年11月18日 市民文化フェスティバル 水墨画体験 描いた作品(獅子舞)

11月25日 定例活動(清掃作業)

今回の清掃作業の中での自然観察で、フデリンドウの芽が出てきました。

フデリンドウは、北海道から九州の日当たりのよい山地に自生するリンドウ科リンドウ属の越年草(秋に発芽して越冬し、翌年に花を咲かせて枯れる植物)です。

清掃作業を終え、定例会では12月1日のシンポジウムや4日の都民フォーラムの紹介と2019年カレンダーの原画募集についてのお話がありました。

12月1日 シンポジウム 「市民が選ぶ玉川上水・分水網の関連遺構100選」

このプロジェクトでは、地域毎に玉川上水・分水網に関連している多くの市民(団体)に関連する遺構の発掘を依頼し、発掘した情報を持ち寄り公開することにより、玉川上水・分水網の水路系統全体の情報共有化を促し保全再生活動につなげることを目的としています。

選定の方法としては、市民団体による選定と選考委員会による選定を経て、関連遺構100選候補が選定されるといった流れです。このシンポジウムに参加して、玉川上水と分水網に関連する遺構の候補の数に改めて地域のお宝の重要性を理解できました。私の地元の志木市にも関連遺構が挙げられていることに驚きました。

玉川上水の歴史についてのお話や河川の研究に関するお話がある中で、ヘドロは止まっている水にしか出来ないというお話が特に印象に残っています。今後の展開について、玉川上水・分水網の関連遺構が失われつつあるという実態からこの選定を契機に保全再生、

利活用が望まれるとしています。そのために市民団体や自治体との連携を促し、保全活動の展開をすることが必要であるとしています。

これらのことを今後認知するために、それぞれの地域が地域に住む人たちの環境に関する関心や活動意欲を持たせることが課題で、地域活性化にもつながってくると思われました。

12月9日 定例活動(清掃作業)

清掃作業を終え、定例会では、1日のシンポジウムの報告とカレンダーの原画選定がありました。柴さんによると、カレンダー選定は地域の誇りとなるものを具体的に自分で確認する良い機会、社会教育の具体例としての評価が大切と示していました。

12月23日 定例活動・忘年懇親会

実習最後の定例活動(清掃作業)を終え、忘年懇親会にて次のように最後の挨拶をしました。

「この実習では、以前より興味があった環境についてのことで、初めての日はどんな活動なのかワクワクしました。会員の皆様の活気の良さと地域を愛する心と活動意欲には驚くことが多々ありました。また、一番印象に残っているのは、ダンロップ(株)と日本ユネスコ協会との自然保護活動です。玉川上水の自然について樹名板取り付け作業を通して学べたこと、多くの人が連携して自然保護活動に取り組むということは社会教育・生涯学習においてもとても重要なことだと思っています。この実習を通して、自然保護それから地域に関する考え方を学ぶことができたことをとても嬉しく思っています。」

(3) 事後

実習の成果を早稲田大学と東京学芸大学で行われたフォーラムやラウンドテーブルにおいて、ポスターセッション報告を行いました。

1) 早稲田教育実践研究フォーラム(早稲田大学) ポスターセッション

聴き手の方に玉川上水を知っている地元の人や興味を持ってくれた方が思ったよりいました。より詳細に質問に答えられるように事前準備をすべきでした。ポスターの見やすさにも工夫をすべきでした。質問として、玉川上水の魅力・活動人員についての質問をいただきました。魅力は、都内にある自然として意外性と長い流域のそれぞれに魅力があることだと思っています。

2) 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学) ポスターセッション

玉川上水の活動の情報発信について、具体的な案をいただきました。今は、情報化社会ということから SNS 活用が有効なのではないかという意見でした。玉川上水のことを知るのも大切ですが、一番私が重要だと考えているのは、自分の住んでいる地域について知ることです。自分の地域について知っているからこそ、気づく点もあると思います。その

ための情報発信をすることも大切だと考えています。

7. 成果

(1) 環境学習・活動を通じた地域理解の深まりと意識変化

今回の実習を通じて、私が得た成果は2つあります。

1つ目は、「玉川上水」、「玉川上水の自然保護を考える会」、そして立川市や砂川地域について知ることができたことです。6月に行ったシンポジウムで得た知識と実習を通じて得た知識とを比較すると、実際にその場に行き、実習で知り得た知識の方が大きいと感じています。実際に会員との清掃活動で自分の目で見た「玉川上水」の植物や現状そして遺構とその歴史、定例会でのお話でなぜ玉川上水のこの砂川地域に魅力があるのかといった、座学では分からないことを知ることができたのが、「玉川上水」と「玉川上水の自然保護を考える会」における実習での大きな成果だったと感じています。

また、立川市や砂川地域については、市民フェスティバルや文化祭といった行事で「玉川上水」の他に伝承民謡のことなど立川市がどんな場所か、砂川地域の歴史について知ること、それが自分の地域だとどう当てはまるのか(歴史や行事)について視野を広げ、自分の地域についての興味・関心をも喚起させてくれたことも成果だと感じています。

2つ目は、地域活動に関する意識が変わったことです。実習をする前では、地域活動をする人たちは行政の人が主体となってその関係者が活動することがほとんどだと思っていました。しかし、「玉川上水の自然保護を考える会」では、地域住民が自らの手で地域の自然環境の保全をしているということがわかりました。だからこそ、地域住民の自然環境の変化に気づき対応することができるのだと感じました。また、地域の方がいかに地域に対する関心を持つかでその地域の活動の重要性が変わってくると思います。

(2) 実習先について

社会教育主事課程の学生の受け入れによって、地域について知ってもらうこと、団体について知り、一緒に活動をする中で、環境について意識・感性を培うことが共有できたと実感しました。五十嵐^{iv)}によると、環境教育は「教える - 教わる」とは異なる面を持つとされていることから、人間相互の関係を伴う教育のあり方が求められるとしています。そのために、その環境を自分自身で認知する契機となることが成果として見込めるものと思います。

(3) 地域社会について

五十嵐^{v)}によると、環境教育における学習は「環境問題を解決するための知識を得る」という側面だけではなく、環境についての学習自体が「自分の周りの環境(他者・自然)について知覚・認知するきっかけとなる」という側面を持っているとしています。

このことから、実習等の活動の中で、自分で自発的に周りの環境を知ることが環境教育

において大切なことだと考えられます。地域社会の活動や自然環境を認知し、情報を伝えていくことが、地域の関心と地域活性化につながる成果になると思います。

8. 考察

(1) セカンドライフと地域への関心

地域について知るにあたって、自分のセカンドライフについて考えることが大切だと考えられます。会員の方々のお話から定年退職した後、自分が人と話したり交流したりする場が必要であると考えます。また、会員の方々の知識(植物、河川、虫など)の豊富さから、こうした場で自分の興味・関心のあることの情報共有も地域への関心を深めるには大切だと考えています。

情報共有と周りの方々の共有が地域に対する意識を変えていくことにつながり、それが地域をより良くするためには必要であると考えられます。

(2) 地域環境の認知と環境保全

五十嵐^{vi}によると、環境教育における学習は、環境問題を解決するための知識を得るだけでなく、その学習が自分の周りの環境を認知するきっかけとなります。そのため、住んでいる地域の環境に主体的に目を向け、そこから感じ取れる気づき(環境の変化など)を得ることが環境保全活動をするうえで大切なことだと考えられます。

実習をご指導いただいた柴さんによると、玉川上水の自然保護活動は、自分たちの住んでいる環境は「自分たちの手で守る」という理念から発足したものであり、社会教育の基本理念である「住民自治」の原点と示されています。

これらのことから、自分の周りの地域環境を認知することが環境保全を考える上で重要であると考えられます。

(3) 今後の展望

環境保全への関心を高めるには、地域へ関心を持ち、自分の周りの環境を認知していくということが必要です。そのための方策の一つとして、具体的には、情報化社会である現在において SNS で伝えていくことが考えられます。それぞれの地域が各活動について独自にネットで情報発信していくことで、各個人が他の人に情報発信をする流れができます。地域の関心を高めるためにより情報を発信することができる SNS を使うことは一つの手法であると考えられます。

環境教育において、地域のことを認知することの大切さを子どもたちに伝えていくためには、地域をテーマにした学習(地域の環境学習など)や体験学習を学校教育でも行うことが効果的であると考えられます。

阿部^{vii}によると、学齢期の環境教育の学習について、自然に対する知識や自然に接するための技術を学ぶこと、そしてそれらが社会・経済的諸問題へとつながってゆくことを学

ぶことが主要な目的であり、環境問題を解決するために何らかの行動をしていくことができるようになることが大切である(「人間と自然についての知識・技術学習」と指摘しています。

私が小中学生の頃、地域についての学習が少なかったことが思い起こされます。今後、それぞれの地域の魅力や自然環境など、地域をテーマとした学習が必要ではないかと考えます。

【謝辞】

当実習においてお世話になりました「玉川上水の自然保護を考える会」の柴会長様をはじめ、会員の皆様に感謝申し上げます。実習で学んだ知識や経験を今後活かしていきたいと思えます。

【参考資料・文献】

- i 富田俊幸 環境学習の紹介—環境学習の紹介と学習効果について—
(https://www.pref.ibaraki.jp/soshiki/seikatsukankyo/kasumigauraesc/04_kenkyu/shoukai/semina/documents/6_gakusyuu.pdf)
- ii 富田 前掲書参照
- iii 台東区 I-4 社会教育・生涯学習
(<https://www.city.taito.lg.jp/index/kurashi/kyoiku/kyoikuiinkai/taitokunokyoiku.files/1-4.pdf>)
- iv 五十嵐牧子 生涯学習社会の視点からみた環境教育の意義
(www.bunkyo.ac.jp/faculty/kyouken/old_web/bull/Bull12/igarashi.pdf)
- v 五十嵐 前掲書参照
- vi 五十嵐 前掲書参照
- vii 阿部治「生涯学習としての環境教育」(阿部治編『環境教育シリーズ1・子どもと環境教育』東海大学出版会、pp.2-16、1993)p.9-11

